

はじめに

「役に立たないロボット」と言われたら、どんなイメージが思い浮かぶだろうか？

筆者がなんとなく思い浮かべたのは、長方形と円形のガラクタを集めてつくったポンコツ感満載の工作のようなものだ。そのようなものを小さい頃に、ティッシュの空き箱とトイレットペーパーの芯でつくったこともあった。

幼少期に見た漫画やアニメにも、いろいろなロボットが出てきた。『ドラゴンボール』（鳥山明）のハッチャンこと「人造人間8号」は、優しすぎて「悟空」をなかなか助けられずハラハラさせてくれた。映画『オズの魔法使』に出てきた「ブリキの木こり」も、あれがロボットかどうかはさておき、なんだか頼りなかった。

「役に立たないロボット」について思い浮かぶイメージを友人に聞いてみると、「『ドラえもん』こそ役に立っていないよね。四次元ポケットの『ひみつ道具』がすごいだけで」と

いう返事だった。確かにそうかもしれない。そういえば、『キテレツ大百科』（ともに藤子・F・不二雄）の「コロ助」も……いや、あれはからくり人形か。

ロボット好きな友だちが夢中になっていたロボットアニメの世界では、あつさりやられる雑魚ロボットを「やられメカ」と言うらしい。ダメそうなロボットと言えば、時代を遡れば、レトロコミックでは、森田拳次の『丸出だめ夫』には「ボロット」が出てくるし、石ノ森章太郎も『がんばれロボコン』を描いている。

最近では、NHKEテレビの幼児向け番組「おかあさんといっしょ」の人形劇『ガラピコぷ〜』のメインキャラクターに、ロボットの「ガラピコ」がいた。うさぎの「チョロミー」、オオカミの「ムームー」と一緒に、三者で友情を育んでいくストーリーは微笑ましかいけれど、「役に立つ」とは趣旨が異なるだろう。

実在するロボットにも目を向けてみよう。本田技研工業の「アSIMOモ」のようなヒューマノイドロボットも、技術的には確かにすごいけれど「役に立っている」と言われれば、ちょっと微妙。というより、何をもって「役に立つ」とするのか、その定義に拠るだろう。二〇一八年にデビューしたグROOVEルXブEXエックス社による家庭用ロボットの「らLOVEボットT」を紹介するインターネット記事の中には、「役に立たない、でも愛着がある」という見出

しがついている。

ロボットとは本来、人間の代わりに危険な作業や重労働を行うよう設計された「仕事をする機械」のことだったはず。だとすれば、仕事をしないロボットは、言葉を選ばずに言えば「役に立たないロボット」ということになる。

にもかかわらず、私たちの身の回りには仕事をしないロボットがたくさん存在するし、キャラクター性が明確で各種メディアにも多く登場する彼らのほうが、産業の現場で黙々と仕事をこなす機械よりもむしろ、私たちにとって身近で「ロボット」という言葉からも連想しやすい。しかし少し冷静になると、本来のロボットとは異なる「役に立たないロボット」がこれほど生み出され、また、受け入れられている社会は不思議にも思える。

私たちが暮らす現代社会では、スピードや効率、生産性、解像度、最適性、再現性などを突き詰めることによって、新しい価値が生み出されている。それを支えているのが際限なく進歩し続けるテクノロジーだ。将棋のAIが人間の棋士よりも強くなったり、スーパーコンピューターの性能が「一秒あたりの演算処理速度が一億の一億倍レベル」にまで跳ね上がったたり、大型の3Dプリンターで住居が「印刷」されたり。これらのテクノロジーはこれからもスペックを高め続け、社会はどんどん高度に最適化されていくのだろう。

それはとても素晴らしいことであり、私たちが受ける恩恵も計り知れない。けれど同時に、ようやく慣れてきたと思った頃にシステムがまた新しくなったり、その性能や技術の高さを示す数字の桁に理解が追いつかなかったり、あまりに高度な機能に自分自身の無能感や無力感を覚えることもある。端的に言えば、最先端のテクノロジーは面白いのだけど、同時にどこか、疲れるような感覚があるのだ。

ならば少しホッとするような、ちょっとゆるいテクノロジーの話をすることはできないか。そこで掘り下げてみたいと思ったのが、「役に立たないロボット」だったのだ。

彼らは「役に立つ」ことを課せられているはずのテクノロジーにおいて、やや異彩を放っている。望まれているからこそ設計され、生み出されているにほかならないのだけれど、では、そこにはいったいどんな「望み」があるのだろうか。

サブカルチャーは独自性が高いものだとよく言われるが、この「役に立たないロボット」が多く描かれ、広く受け入れられるのも日本に特有のことなのだろうか。

こうした問いを通じて、「役に立たないロボット」たちがどのような背景で生み出され、どのような意義を持って社会に存在し、未来にどんな役割を果たす可能性があるのかを考察してみたいのだ。

見つけた答えが、「役に立つ」かは分からない。しかし、そんな「役に立たない」かもしれないことを、真面目に、時にはゆるく、深く考えてみるのは、それ自体が楽しいことではないか。結果としてこの本が、スペックを競うテクノロジーについての「疲れる」という感覚を少しゆるめるような、「ちよつとホツとするテクノロジーの話」になれば良いと思うのだ。

なお、先に白状してしまうと、筆者はロボットの研究者でも専門家でもない。大学は理系とはいえ農学部卒である。

読者の皆さんと同じようなフラットな目線でロボットたちと向き合い、その開発者や研究者をはじめとするいろいろな方たちに話をうかがいながら考察を深め、科学コミュニケーション者として皆さんとロボットの間をつないでいければと考えている。

どうぞ、お付き合いください。

第一章

どのような「役に立たないロボット」が存在するのか？

超人系、萌え系、ポンコツ系

さて、「役に立たないロボット」とは具体的に、どんなものが存在するのか。まずは漫画をはじめとするフィクションの世界から概観してみよう。

学生時代にサークルの部室で読んだ『究極超人あゝる』（ゆうきまさみ）の主人公「R・田中一郎」は、自分の身体を炊飯器につないでご飯を炊いたり、頭突きで壁に釘を打ち込んでみたり、自らの脚で自転車を漕いで新幹線並みのスピードで東京から京都まで移動してみたり、彼からは超人的なポジションでギャグを担当するロボットの立ち位置が浮かび上がってくる。『Dr.スランプ』（鳥山明）の「アラレちゃん」も、キーンつと走っていつてパトカーに衝突して破壊したり、パンチで地球を割ったりと、ハチャメチャだ。漫画の世界では「人間には絶対できないこと」をできるキャラクターを描くために、「ロボット」という存在が重宝されている（ロボットだとしても非現実的な描写ばかりだが）。

二〇一〇年代以降の漫画では、『フルチャージ!! 家電ちゃん』（こんちき）や『ぽんこつポン子』（矢寺圭太）など、^ス萌え系^スの要素が入った作品が目立つ。生活を助ける家電の機能と、コミュニケーション能力を持つメイド（というより美少女）の外見をしたおっちょこちよいなロボットは、男性読者たちの一種の「幻想」を絵にしたものなのだろうか。こ

れは確かに、ロボット工学とは一線を画すロボット文化だ。

そうかと思えば、『魁!! クロマティ高校』(野中英次)の「メカ沢新一」や、『21エモン』(藤子・F・不二雄)の芋掘りロボットの「ゴンスケ」、ちよつと古いところでは『がんばれロボコン』のように、「役に立たなそうな見た目」の王道を行くロボットもいる。『こちら葛飾区亀有公園前派出所』(秋本治)では、警視庁開発の「4号乙型」なるロボットが派出所に派遣され、「両さん」に「丸出ダメ太郎」と命名されていた。

さらに恋愛モノの少女漫画『彼氏彼女の事情』(津田雅美)にも役に立たないロボットが出てくる。主人公たちが通う高校の文化祭で、天才科学者と新型と旧型のアンドロイドが出てくる劇が演じられる内容。つまり、漫画というフィクションの世界の中に、もう一段階、演劇というフィクションの世界が存在する劇中劇の展開なのだ。

あらためて考えてみると、これらの「漫画だから描ける」「フィクションの世界にのみ存在する」ようなロボットは、非現実的・超人的なキャラクターを登場させるための存在と考えられる。では彼らは、たとえば「らぼつと」のような市場に実在するロボットと関係するのだろうか。

実在するロボットにもいろいろ

実在するロボットについては、筆者が以前、お台場にある日本科学未来館に科学コミュニケーションーターとして勤めていたときにも実機をいくつか見てきた。館内には、世界初の二足歩行ロボット「アシモ」や、人間の女性そっくりにつくられたアンドロイド（人造人間）、大阪大学教授の石黒浩さんらがつくったアンドロイド、産業技術総合研究所によるアザラシ型セラピーロボットの「PARO」などの展示や実演があり、ソニーの大型ペットロボット「AIBO」が登場することもあった。

「アシモ」は、本格的な二足歩行を実現した高度な工学技術を搭載していることに加え、集客力が高く、アメリカのオバマ大統領（当時）の来館時に対面して歓迎の意を示すなど、コンテンツとしてとても役に立っていた。けれど、日常の生活で役に立つ場面があるかと言われれば、ちょっと微妙だ。

人間そっくりのアンドロイドも、展示として人目を引いていたし、テレビ番組に出ても面白い。しかしながら、「人間らしさ、生物らしさとは何か」という哲学的な探究をするためにつくられたロボットである以上、日常的に「役に立つ」ことを求めること自体がナンセンスだ。

身体に触れたときに優しく反応することで癒し効果を発揮する、セラピーロボット「パロ」はどうだろう。東日本大震災の被災地施設で活躍した実績もあるし、筆者も仕事があうまいかないときに、展示フロアで「パロ」を抱きかかえて紹介しながら、結果として自分も癒されたように感じた経験がある。ペットの代替として多くの人に愛されてきた「アイボ」もまた然り。これらのロボットは「アシモ」やアンドロイドと異なり、私たちの日常生活の中で「役に立っている」ようにも感じられる。

ところがあらためて、『ロボットは友だちになれるか 日本人と機械のふしぎな関係』（NTT出版 二〇一一年）を読んでいくと、著者にして「アイボ」の構想にも関わったフレデリック・カプラン氏は当時を振り返りながら次のように述べている。

エンタテインメント・ロボット、つまり役に立たないロボット、何らかのサービスを提供するのではなく、ただただ存在し、気に入られ、自律していることだけを役目とするロボット、そして、いつか人間がそのような機械と情動的な関係、さらに相互的な関係を築けるなどという考えは、わたしが出会った人の多くには想像もつかないものだった。

この本は、「エンタテインメント・ロボットは、日本という、西洋とは異なった文化で誕生した」として、洋の東西の世界観や価値観の違いを掘り下げていく内容であり、全体としてこうしたロボットを否定的に扱っているものではない。ただ、おそらく欧米では一般的なのであろうこの価値観からすると、「パロ」もロボットとして「役に立たない」「サービスを提供するのではない」ということになる。

いったい「役に立たない」とは、どういうロボットに使うべき言葉なのだろうか。

さらには「ロボット」と考えるべきか否かに悩む存在もある。

ボーカロイドのキャラクターである「初音ミク^{はつね}」と結婚した人がいるという情報があり、Web上には確かに「2次元キャラと〴〵本気の挙式^{〴〵}」という記事もある。人間と人工知能的な存在が関係をつくることができる象徴的なケースと言えそうだ。

しかし「初音ミク」も、役に立つ・立たない以前の問題として、ロボットなのかと言われれば違う気もしてくる。フィギュアやぬいぐるみが存在するし、バーチャルリアリティにもなっているけれど、もともとは記事の見出しにもあるように「2次元」の存在なのだ。とはいえ、インプットに応じて歌ったり、会話をしたりできるから、同じ2次元でも漫画

やアニメのようなフィクションにおいてのみ存在するキャラクターとは異なり、現実の日常生活の中で双方向の交流をすることができる。そういう意味では物理的な実体がなくても、ロボットっぽい要素があるように思えてくる。

「役に立たないロボット」の線引きはできるか

いろいろと調べてみたものの、「何をもって役に立たないとするか」も、「どこまでがロボットなのか」も、簡単には決められない。

まず「役に立つ・立たない」は、絶対的な評価軸を設定することが難しく、判断する人の主観や価値観によって変わるのだ。

たとえば、会話できるコミュニケーション・ロボットがいたとする。それは、掃除や洗濯をこなしてくれるロボットを求めている人にとっては「役に立たない」ロボットだ。話し相手を求めている人にとっては「役に立つ」かもしれないけれど、会話が面白くなければ「やっぱりこいつ、役に立たない」となる。

加えて、「ロボット」に含む、含まないにも、いろいろな考え方があある。

たとえば、国立研究開発法人新エネルギー・産業技術総合開発機構（NEDO）の「NE

D Oロボット白書2014」(二〇一四年三月)では、ロボットを「センサー、知能・制御系、駆動系の三つの要素技術を有する、知能化した機械システム」と定義している。また、SF作家のアイザック・アシモフは、ロボット工学の三原則として「人間に危害を加えてはならない」「人間の命令に従わなければならない」「自己を守らなければならない」を挙げている。しかしこれでは、Eテレの「ガラピコ」や、パトカーを破壊する「アラレちゃん」、人にいろんな損害を与える「ロボコン」の扱いが難しい。

ここで一度、当初の動機に立ち戻ってみることにしよう。

本書では「役に立たないロボット」の社会的な存在意義や未来への可能性を考えていきたいのだ。つまり、「役に立たない」と言っておきながら「実は役に立っているはずだ」と筆者は思っているのである。

それに、「役に立たないロボット」を考えるヒントは、必ずしも「役に立たないロボット」だけにあるとも限らない。明らかに役に立っているロボットから「ロボットであることのメリット」を考えることもできる。「役に立たない」ことの価値を考えるヒントも、ロボットではないぬいぐるみや玩具^{がんぐ}、あるいはもしかしたら自分自身から得られるかもしれない。

つまり、「役に立たないロボットであるか否か」は、「役に立たないロボットを考察する材料になるか否か」と、必ずしも一致しないのだ。だとすれば、「役に立たないロボット」の定義や範囲をあらかじめ決めてしまうなんて、ナンセンスではないか。

『Pepper』は「役に立つ」ロボットで、『アシモ』は「役に立たない」ロボットで、『初音ミク』は元来二次元の存在なので「ロボット」に該当しなくて、お掃除ロボット『ルンバ』も生物っぽく見えないから今回は「ロボット」として扱いません」なんて審判めいたことをしても、本質的な意味がないばかりか、異論があちらこちらから出て収拾がつかなくなり、それこそ「役に立たない」。

「役に立っているか」や「ロボットであるか」よりも、その考察対象がどんな要素によって、どんな価値を発揮しているかを考えることが大切になってくるはずだ。

プロダクト、デモンストレーション、フィクション……

そこで「役に立たないロボット」の定義や範囲を規定することを諦め、代わりに、今回の考察対象となるロボットとそれに類するものについての「存在形態」と、人に「役に立たないと感じさせる要素」を簡単に整理することにした。

役に立たないロボット 日本が生み出すすごい発想
谷 明洋

発 行：集英社インターナショナル（発売：集英社）

定 価：1,045 円 (10%税込)

発売日：2025 年 2 月 7 日

I S B N：978-4-7976-8153-6

ネット書店でのご予約・ご注文は [こちらからどうぞ！](#)